

secretory component specific) をまたSCの検索にあたっては抗ヒトSC家兔血清(DAKO社)を希釈して一次抗体と同様にPAP法を行なった。

対照群の小唾腺ではIgA, SCとも約1/3の症例に陽性所見が認められた。陽性部位は介在部小葉内および小葉間などの小導管上皮細胞であり、粘液腺房細胞ではIgAおよびSCとも陰性であった。また全般的にSCはIgAより顕著な陽性所見を呈した。

Pleomorphic adenomaではIgA, SCとも約1/3の症例に陽性所見がみられ、さらにIgAとSCは同一の部位に認められることが多かった。また、Pleomorphic adenomaでは対照群と比較してIgAおよびSCにより顕著な陽性所見を呈するものが多く、陽性細胞の出現頻度も多くなっていた。Pleomorphic adenomaは多様な組織像を呈する良性腫瘍であるが、組織型とIgAおよびSCの局在性との関係については、腺管状および充実性に増殖する腫瘍上皮細胞で陽性を呈し、粘液様と軟骨様部の腫瘍細胞およびその周囲間質、硝子化部分は陰性であった。Monomorphic adenomaの1例ではIgAおよびSCに中等度に陽性を呈する腫瘍上皮細胞が一定の局在性を示さずびまん性に散在していた。

演題10 濾胞性歯嚢胞における hyaline body の病理組織学的検討

○守田 裕啓, 武田 泰典

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

歯原性嚢胞に特異的に出現するとされている hyaline body (以下 hb) の由来として従来より種々のものが考えられるが、大別して血液由来説と上皮細胞由来説とがある。近年 hd は dental cuticle (以下 dc) と同様の性状を示すことから、歯原上皮に関連したものとも考えられている。今回我々は hb が高頻度に出現するとされている濾胞性歯嚢胞について当教室で過去12年間に扱った生検例をもとに臨床病理学的ならびに病理組織学的に検索した。hb は106例の濾胞性歯嚢胞の内10.4% (11例) に認められ、その出現頻度は従来の報告とほぼ一致していた。臨床的に hb の出現は年齢、発症部位などと特に関連はなかった。hb の出現頻度を組織型別にみると、dentigerous cyst 6例、primordial cyst 5例と大差はなかったが、その組織学的な出現部位はほとんどが上皮内であり、上皮下に

認められたものは1例のみであった。hb の多くは嚢胞腔内面に突出した上皮内に認められ、形態的には lamellar, linear, homogenous などの様相を呈していた。

hb の種々の染色性はオルセイン染色、コンゴ赤染色に陽性であり、ベルリン青染色、PAS、アルアン青染色、トルイジン青染色などに対しては陰性、もしくは一部弱陽性を呈した。電顕では hb は上皮細胞の胞体内外に認められ、とくに胞体外の hb に接する上皮細胞の基底側には hemidesmosome が認められた。また lamellar な hb では同心円状の構造が電子密度の濃淡として交互に配列し、homogenous な hb は不定形で density もやや低下していた。

hb を dc との関連で検索すると、dc は hb 同様オルセイン、コンゴ赤陽性を示した。また症例の中には dc が次第に肥厚し lamellar な hb に移行している像を呈する所があり、hb は dc と同様に歯原性上皮細胞に由来することを示唆する所見と考えられた。

演題11 本学の生検にみる癌舌の病理学的検討

○佐藤 方信, 畠山 節子, 佐島 三重子
鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年、本邦においては舌癌による死亡者は遂年的に増加している。著者らは舌癌の実態の解明を目的に本学中検病理にて過去10年間(1972—1981)に取扱った舌癌生検98例をもとに病理学的解析を試みた。

性別症例数は男性68例(69.4%)、女性30例(30.6%)であり、来院時年齢では50才代が25例(25.5%)で最も多かった。発生部位別に症例数をみると舌体左側縁が50.9%、右側縁が34.6%の症例でみられ、症例の50%は疼痛を主訴としていた。組織学的分化度(WHO)別には Grade I が57例(58.2%)、Grade II が32例(32.7%)、Grade III が9例(9.2%)であった。上皮浸潤程度別には粘膜下組織へ浸潤していたのが10例(10.9%)、筋層まで浸潤していたのが82例(89.1%)であり、浸潤様式別には滴下浸潤が38例(39.6%)、癒合浸潤が58例(60.4%)であった。癌周囲炎症細胞浸潤では軽度の浸潤を示す症例が57例(58.2%)、高度の浸潤を示す症例が37例(37.7%)であり、浸潤細胞は主にリンパ球で時に好中球をまじえていた。